

4. 日 本

◇日時 1996年9月6日(金) 10.30~12.30

◇場所 (社)日本機械学会 会議室

対談者 小野義一郎〔(株)小野測器〕
 三浦 安帆〔日本科学技術情報センター〕
 航空宇宙部門翻訳抄録員〕
 森 昌幹〔(財)群馬大学科学技術振興会〕
 神力 達夫〔CEC(経営顧問)事務所〕
 久本 祥次〔日管(株)〕
 金井 実徳〔(社)機械技術協会〕
 司 会 大橋 秀雄〔工学院大学〕

○司会(大橋) それでは、これから座談会を始めさせていただきます。「まえがき」で簡単に触れていますように、今までの日本の工学教育は、明治以来を考えてみましても、四つの局面がありました。まず最初は、明治の初めの西欧の進んだ工業技術をどのように取り入れるかという時代です。これは、工学教育の祖として有名な、ダイアー氏、あるいは機械の分野ですとウェスト氏のように、主にイギリスから教師を呼んで日本の工学教育の基礎をつくり上げた導入の時代です。その次は、日本の海外進出、特に日清・日露戦争以降の海外進出に伴って現地で高等教育が展開された時代です。そして、3番目の局面は、昭和20年の敗戦後に、アメリカの教育形態がほとんどそのまま日本に移植された時代です。そして、4番目の局面は今起こりつつあるものです。現在は、どちらかというところ、これから日本の産業、経済、文化のすべてが国際化する中で、教育をどのように国際化しなければならないかという新しい局面に入っているかと思えます。

これら四つの局面のうち、最初の明治の時代と昭和の敗戦後は、いずれも外から変化が押し寄せてきたこととなります。今我々が直面している変化は、むしろ自分からどうしなければならないかという自律的なものだと思っております。そういう意味でいうと、海外進出に伴って高等教育を現地に展開したときは、かなり自主的に教育の理念や組織を築きあげたと思われまますので、そのときの経験が今また生きてくるんじゃないでしょうか。

しかし、2番目の局面というのは、日本の軍事的膨張の時期と重なっておりますので、とかくいろいろな面でタブーなところがあり、仲間うちでは語り継がれているけれども、ほとんど公にされていないということが多かったようですね。この100周年という貴重な機会に、この座談会を通じて重要な事柄を後世に残したいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

それではまず初めに、経験された教育の良い面や問題点をお話しいただくことから始めたいと思います。

旅順工科大学(以降旅順工大と略称)の小野さんの方から口火を切ってください。

経験された教育とその良い面、 役立った点、問題点等

○小野 私は小野義一郎と申します。旅順工大の電気工学科を昭和16年12月に卒業いたしました。真珠湾攻撃の行われた時なので、私も当然軍隊に入りましたが、運が良いといいますが、技術将校の試験に合格したものですから、すぐ翌年の2月に陸軍の幹部候補生になりました。そして、4月に中尉になりまして、満州の南満陸軍造兵廠に配置されて主に戦車の生産に従事しました。その後、満州飛行機が爆撃を受けて、公主嶺に疎開しましたが、そこでキー84という戦闘機やその他いろいろ飛行機の製作、あるいは検査の現場を担当しました。

当時の電気は強電が主でして、私はたまたま趣味で、弱電といいますが、ラジオの修理や組立てをしておりました。その趣味から、独学でエレクトロニクス技術を習得し、それを軍隊で経験いたしました機械の関係と結びつけて今の小野測器を創設し、現在では、上場企業にまで育てました。

戦後の中国との交流としましては、ちょうど文化大革命のときに中国に講義に行き、それ以来、非常に密接な関係に私どもの会社はあります。実を言うと、旅順工大を卒業したと言いますと、中国の皆さんは仲間に入れてくれまして、私は北京の清華大学、南京の東南大学、重慶の重慶大学の客員教授に招聘されておりました。そこで、これらの大学の卒業生が私の会社で共同研究をやったり、また、そのうち数名の者を日本の各大学に派遣いたしまして学位を取らせたりしました。

考えてみますと、このように中国人との間ですぐ仲間同士になれるということは、旅順工大の予科は全寮主義であり、興亜寮というところで中国人と一緒に寝起きをし、同じ釜の飯を食べたということに第一歩があるようです。

ただし、当時の旅順工大は、中国にあると言いましても教官はほとんど日本人でした。もう一歩進めて、中国人の教授や助教教授による中国語の講義があったならば、もっともっと親密になれたのではないかと思います。いろいろ中国の方と付き合ってみますと、やっぱり心置きなく本当に内心をさらけ出してやるのが大事だと思います。考えてみますと、いちばんの罪



小野 義一郎
おの ぎいちろう

◎1918年11月生まれ
◎1941年旅順工科大学電気工学科卒業
◎陸軍技術大尉として旧満州南満陸軍造兵廠に勤務。引揚者として1947年に復員後、小野測器研究所設立。(株)小野測器に組織変更し、取締役社長に就任。第1部上場企業に育てた。現在、(株)小野測器名誉会長
◎主な研究テーマ デジタルトルクメータなど
◎(株)小野測器 (〒220 横浜市緑区白山1-16-1)

は、表面では平等のようであっても、ところどころに日本人ばかり優遇したという不平等が見えてるんですね。

○司会 ありがとうございます。それでは、三浦さん、続けてお願いします。

○三浦 私は、旅順工大の航空学科を昭和16年12月に第1回生として卒業しました。その後、技術将校として満州や仏領インドシナで航空機の整備を行い、都立航空工業高等専門学校の教授を務めました。この学科の教育には、少々特異なところがあったように思います。と言いますのは、当時はもちろん戦争の時代ですから、例えば「爆弾を最大限積み、遠くまで飛べるような飛行機はどういう着眼で設計するか、また、それを設計図に書いてみよ」という教育でした。

教授の先生方を始め、助教授や助手の人たちも、戦争に勝つことが第一だというような感じがありまして、本当の学問らしい航空学といえますか、今の時代でいえば月世界、あるいは火星を探検するためにはどういう学問が必要であるかという視点はあまりなかったですね。

私ら航空学科の学生は、卒業後は航空関係の会社に皆就職したわけですが、兵器としての飛行機の生産に役立った面、ならびに平和的な航空宇宙のエンジニアリングに貢献した面があります。

○司会 今おっしゃった航空学科は、まさしく国の存亡にかかわる花形兵器を生産する技術者を養成するところでしたね。

では、次は京城帝国大学の方に参りまして、先に卒業された森さんの方からお願いします。

○森 京城帝国大学(以降城大と略称)理工学部は昭和16年4月にできました。私が機械工学科を選んだ理由は、実は大変迷ったのですが、小さいときから模型の飛行機とか機関車をつくること、また、それらを見るのが好きであったのが影響していると思います。

できたばかりですから理工学部全部でも学生数は少なく、むしろ最初は教職員の方が多いという状態でした。したがっ

て、今のような学生の多い大学にみられる詰め込み教育と比べますと、講義もマンツーマンでした。また、先生方も大変若い方が多くて、本当に親身の接触をしていただき、そのような経験は今でも印象に残っております。

私は第1回生でしたので、理工学部の建物や実験機械類が整備されておらず、最初の年は法学部の建物で講義を受けました。その後、孔德里に新しい校舎ができて、そこで授業を受けました。卒業研究では、北海道大学から来られた下坂先生のご指導のもとに流体の実験をさせていただきました。ただし、当時は実験装置が余りなかったので、先生や助手の方が苦心してつくられた三角堰を使い、流量の測定をしました。何しる期間は半年しかありませんので、研究というほどではありませんが、自主的に測定をしたり、観察したりということで、大変興味がありました。後で話を聞きますと、フランス水車、カプラン水車、渦巻きポンプ等の設計書を提示して東京の方に注文をしたそうですが、軍部から中止命令が来て、それが入荷しないうちに終戦になったということです。大変残念に思いました。

あと、昭和18年9月に卒業しまして、鴨緑江水力発電会社の本社(在京城:現在のソウル市)に入社しまして、発電所関係の設計を行いました。そのときに鴨緑江の水豊ダムを視察に行き、このダムは朝鮮全部に電力を供給しても余るぐらいの非常に大きな発電力を持っているという話を聞いたことがあります。その4箇月後には招集され、戦線に参加して戦後2年半ほどして郷里の福岡の方に帰ってきました。私の同窓生の中からもだいたい戦死をされた人がありまして、帰ってきてから非常に残念に思いました。その後、昭和34年に群馬大学に参りました。あの当時に予科、大学を通じて、習った学問は、すべてが大変役に立ったと言えます。極端な例を挙げますと、私は教練が苦手でございましたけれども、戦地に行ったときに、その経験が非常に役に立った。あの当時はつまらぬと思っていたことが、ほんとに生死をかけるときに役に立った。ですから私の感



三浦 安帆
みやま やすひろ

◎1920年1月生まれ
◎1941年12月旅順工科大学航空学科卒業。陸軍航技大尉として陸軍満州航空廠、仏印第22野戦航空廠勤務復員。戦後1951年小松製作所本社。1957年航空自衛隊(実験航空隊、航空幹部学校)。都立航空工業短期大学教授、工学院大学、東海大学の航空宇宙学講師
◎分野・専門 航空宇宙工学-航空宇宙機用推進システムの研究
◎現在の研究・業務 Advanced Turbo Fan Concept with Regenerator and Inter-Cooled Compressor
◎自宅、(〒206 多摩市愛宕4-31-2-102)

じでは、そのときは役に立たないと思うかもしれないが、どんな学問でも習っておれば、あるときに非常に役に立つことがあるということを今でも痛感しております。

当時、機械工学科は8人で、同窓でありました韓国の卒業生として、金慶植さん。それから金在瑾さんがいらっしゃいます。金慶植さんについては、神力さん、後で詳しくまた……。

○神力 そうしましょう。

○森 それから金在瑾さんは、数年前に日本に来まして、お会いしましたが、ソウル大学校工科大学の教授ほかの要職にあります。また、金熙喆さん、この人も同窓ですが、ソウル大学校工科大学の教授ほかの要職にありました。それから全啓相さん、この人はアメリカのボーイング社に戦後勤めております。同窓生は韓国だけではなく海外でもいろいろ活躍しております。ほかの科の卒業生も含め、城大出身者はいろいろと戦後の韓国建設のために大変活躍していることをうれしく思っております。

それから、私と同期の人で、城大の法文学部出身に前田利一さんという人がいます。少し前に韓国大使をされまして、日韓のいろいろな友好に尽くされておりました。

さらに、大学全体の印象ですが、当時は外地だったせいか、自由で自主的な気風がありまして、戦時下の拘束というようなものは余り感じておりませんでした。なお、学生の身分でしたので、細かいことまで、私たちは存じていませんでしたが、長い統治時代に韓国の方たちが——後でこれはわかったわけですが——いろいろと国の政策によって痛みを受けたということを痛切に感じております。この点を我々はよく理解して両国がさらに親しくなるように念願しております。

最後に、同窓会のことですが、城大の日本の同窓会とソウル大の同窓会の間に現在も密接な関係がありまして、連絡をとったり、行き来をしたりしております。

○司会 ありがとうございます。では、神力さんお願いいたします。



森 昌 幹
もり しょう けん

- ◎1922年2月生まれ
- ◎1943年京城帝国大学理工学部機械工学科卒業。1959年群馬大学工学部講師、助教授を経て教授。1987年群馬大学名誉教授
- ◎分野・専門 機械工学、機械加工学
- ◎正員、(財)群馬大学科学技術振興会審議委員会審議委員
- ◎自宅、(〒376 桐生市平井町3-37)



神 力 達 夫
じん りき たつ お

- ◎1922年2月生まれ
- ◎1944年京城帝国大学理工学部機械工学科卒業。敗戦まで、海軍技術士官(航空発動機)。1946年より中小企業にて、金属、産業機械の仕事に従事。1967~87年(株)ハイト代表取締役として、食品加工自動機械。1987年よりCEC事務所にて顧問業を自営。現在に至る
- ◎分野・専門 産業機械の開発・製造販売。廃棄物処理の合理化。会社の経営顧問。中小企業の経営指導(国内および欧州の企業など)
- ◎現在の研究・業務 廃棄物処理、リサイクルの合理化とシステムの開発
- ◎CEC事務所(〒262 千葉市花見川区花園町44-7)

○神力 自己紹介を簡単に申しますと、昭和19年の秋に城大の理工学部機械工学科を卒業しております。海軍の委託生だったので、その後直ちに、士官になる教育を受けた後に海軍の航空廠の実務につきました。広島県呉市の隣の広町にあった、海軍第11航空廠で発動機の担当をしました。敗戦後一時ソウルへ戻り満州や北朝鮮から脱出してきた日本人の救援活動をして、昭和21年春に帰国しました。その後、鋳造業、食品機械製造会社に務めた後に独立、20年間、機械製造会社を自営、今はコンサルタント業を行っています。

戦争当時、日本の技術は、生産性あるいは生産設計というのが十分に行われていなかった。「ひとりよがりの設計」で、加工も組立てでも大変難しい発動機でした。例えば、発動機を試運転台に乗せて検査すると、潤滑油まで燃焼するというようなありさまでした。今思うと、品質管理なんていうのは考える暇もなく、試運転で合格するのが不思議なぐらいでした。発動機の排気中に潤滑油が混じって出ると、戦闘機の場合、風防の前に発動機があるので、風防にべったり油がつくということになります。要するにパイロットは先が見えないわけで、これは致命的です。

城大は予科から続いていましたので、私どもは真理とは何か、あるいは人生をどう生きるかというようなことを追求し、本当に何の制肘もない時代を過ごしました。国を挙げて戦争に突入していた時代ですから、我々もやっぱり使命はそちらにあるのかなというような、今で言えば随分マインドコントロールされたなという面もありますが、純粋な気持ちで過ごしたということは否めないと思います。また、韓国の友人たちや、学友たちとも、フランクに人間としての付き合いをしたというふうに私は思っております。今でも、国が違いますといろいろ問題がありますが、学問・芸術には国境がないというのが本当だと思います。今でも、韓国の友人とは親しく付き合い、韓国に行くと、何かにつけて集まって一杯飲んだり、また



久本 祥次
ひき びと しょう じ

◎1922年10月生まれ
◎1946年台北帝国大学工学部機械工学科卒業。
1953年高砂熟学工業(株)、中央設備エンジニアリング(株)、菱熱工業(株)、現在、日管(株)相談役
◎分野・専門 空気調和・冷凍
◎現在の研究・業務 空調。特に潜熱蓄熱の企画、設計
◎日管(株) (〒430 浜松市池町220-4)

歓談をして旧交を温めています。また、私は会社を経営していましたので、その会社に韓国の技術者を5名呼んで、実際の作業と一緒にやり、図面も作成し、それを持ち帰ってもらうような、我々の持っている技術を韓国の人たちに提供することも行いました。私は、そういうことがなすべきことのひとつでもあるんじゃないかというふうに考えてきました。

今、森さんがおっしゃったように、私も城大の理工学部はとにかく初めは七学科の総勢40人で、その後80人ぐらいのクラスになりましたけれども、お互いに非常に仲がよくて、科を超えて交流が行われていました。簡単に言うと、塾のような感じの学部および学科でした。

ところで、我々の機械工学科の同窓生は、京城帝国大学の「城」を使って「城機」という同窓会をつくっています。年に1回ぐらいは集まって、いろんな情報交換をしたり、あるいは旧交を温めたりしており、また、城大および予科は、「紺碧」という——「紺碧はるかに……」という予科の校歌に由来していますが——同窓会誌も発行しています。

私は、浅野友一先生、この方は旅順工大からおいでになった非常に熱心な方で、その先生の指導で自励振動の卒業実験を始めたのですが、戦争のために繰り上げ卒業になり、途中でやめました。

日本と韓国の間具体的な橋渡しには、この同窓会が大きく役立っていますが、その他に、技術士制度も貢献しています。韓国の技術士制度は、日本の制度より遅れ、1962年にスタートしました。金慶植さんが、科学技術庁におられて提唱したのです。たまたまご自分が受験して韓国の技術士の第1号となったのです。日本と韓国間の技術士の交流会が1969年金さんの訪日時の提案を機としてでき、奇数の年は韓国で偶数の年は日本でという形で、交代に会合を持つことになりまして、いまだに続いております。

それから私どもの仲間は、敗戦のために卒業しないで途中で日本に帰ってきて、日本の大学に転学をしています。これは理

工学部創設の立て役者で後に総長になられた山家信次先生が、成績票や関係書類すべての副本をつくって、学生に持たせて帰らせたとという大変行き届いた配慮のおかげではなかったのでしょうか。ちなみに、機械関係でも東京大学に7名、京都大学に3名、九州大学に10名、東北大学に1名、東京工業大学に2名の計23名が転学し、皆さん無事に卒業されました。

○司会 ありがとうございます。城大は、それを実質的に受け継いだ形でソウル大学校に移行していますね。ソウル大学校は韓国を代表する大学で、例えば、機械工学科の長老の李澤植さんは、敗戦のとき城大の一年生でした。そのほかにも長老の教授の方には、城大の経験のある人や場合によっては日本の帝大の経験がある人がいらっしゃいました。初対面のときは分からないのですが、親しくなるにつれて昔のことをだんだんお話しして下さいます。

ところで、韓国の大学は戦後アメリカ一辺倒でして、日本と交流はほとんどなかったのですが、李澤植先生とお会いしてから、とくに日韓の機械学会が中心となって、流体と熱の分野で定期的にシンポジウムを開くようにして、随分交流が深まってきました。それから去年、韓国機械学会が創立50周年を祝いました。ちょうど敗戦の年に機械学会を創ったのですから、私は祝辞の中で、「解放直後の混乱の中で機械学会をつくるというのは、よほどそのときの人たちに先見の明があったのですね」と敬意を表してきました。そのような古い世代の方々日本語で話をされますね。本当に交流が深かったんだなということ、私は少し後の世代に属しますが、しみじみと感じたわけです。残念ながら、そういう人たちは第一線をほとんど退かれ、韓国でも世代交代が起こっているのも確かですね。

それでは、次は台北帝国大学の方に参りまして、久本さんからお願いします。

○久本 私は、台北帝国大学の(以降台北帝大と略称)工学部機械工学科の第1回卒業生です。台北帝大には、昭和16年の時点では工学部はなかった。軍の要請で、急きょ工学部をつく



金井 実徳
かな い み のり

◎1926年1月生まれ
◎1951年九州大学工学部機械工学科卒業
1951年工業技術院機械技術研究所
1984年日本シュルンベルジェ(株)
現在、(社)機械技術協会会長
◎分野・専門 生産技術
◎(社)機械技術協会 (〒105 東京都港区芝公園3-5-8)

ろうということになり、昭和16年になって学生確保の意味で予科の生徒募集をやりました。

ところが、文部省その他の許可が下りなかったのか、時期がおくられて5月に入学試験をやるような羽目になった。5月10日から入学試験をやって、6月20日開校。当時は戦争中で、みんなファイトがあったのか、とにかく1年も2年も夏休みなしのぶっ通し授業で挽回した。そして、予定どおり、私たちが予科終了と同時に工学部へ入れるように工学部が設立されました。

ところで、昭和18年10月の設立ですから、戦後の昭和21年9月で学部3年になるんですけど、私たちは昭和21年の3月まで台湾にいて、その後日本人全員が内地送還になりました。半年足りなかったので、当時の学生は、昭和21年9月になれば本卒業になるという仮卒業証書をもって帰ってきたわけです。その一方、半年短いので転学証明書も同時にくれましたので、内地の大学に転学する者もいました。

日本の政策として、「南進日本」ということが盛んに叫ばれたころなんです。「南進日本の先駆けだ……」というあの歌を神戸の港でかなり立てていました。台北帝大工学部は南進日本の先駆けだというつもりで私たちは行ったわけですが、学部2年半で戻ってきました。そのとき機械工学科では、劉鼎嶽氏1人だけが台湾人で、工学部全体としてはあと数人の台湾人がおりました。台湾人と当時仲よく勉強したわけです。

私たちは、2〜3年前に、「鐘韻」という名前の50周年の記念誌をつくったんです。「鐘韻」というのは、昔私たちが鳴らした鐘の音が、韻々としていまだに台北帝大の後身である台湾大学に残っているんだという趣旨です。それほど日本人と台湾人とは非常に親密にいつてると思われるんです。今、台湾は工業立国で、隆盛を極めていて、その一翼は確かに台北帝大の工学部が担っているのではないかと思います。日本の教育は依然として台湾に残って、今日の台湾を築いたんだと思います。それから、私たち台北帝大の機械工学科の主任教授は長岡順吉先生という冷凍工学の大家の方で、長岡半太郎先生の四男坊でした。そのせいか、私も冷房・冷凍機屋になり、高砂熱学を務めるようになったわけですけど、仲間も何人か冷凍機屋になりました。

○司会 ありがとうございます。では、最後になりましたけど、金井さんお願いします。

○金井 私は、昭和18年4月に台北帝大予科の理科工類に入りました。私どもは全国的に高等学校の終了年限が2年で終わった唯一の年次じゃないかと思うんですが、予科を終えたのが昭和20年3月で、私の記憶では、3月の中旬に予科の卒業式がありまして、たしか下旬に工学部に入るんだということでしたが、その翌日に、兵隊に召集されました。このとき、大学の2回生も兵隊にとられたんじゃないのですか。

○久本 そうです。2回生もとられて、1回生だけは、工学部を間もなく卒業だということで免除されたんですね。

○金井 ですから、当時、学生隊みたいな形で陣地の構築訓練をやらされまして、そうこうしているうちに――すでに我々は

徴兵検査を受けてましたから――、私の場合も8月1日に現役編入という形で、海岸陣地を守護していた連隊に入って特別甲種幹部候補生の試験を受けるかどうかということをやっていたら終戦となりました。9月2日に除隊して家へ帰ったんですが、友達の情報を集めてみますと、大学の講義が始まっているので、びっくりして行きました。たしか11月ごろに大学の接収とかがありまして、あまりしっかりした講義を受けられないまま引き揚げの準備をして、日本には4月に帰ってきました。私の場合には九州大学の方に入り直して、新たに勉強しました。その後は、通産省工業技術院の方へ務めました。

きょうの話題は高等工業教育ということなんですが、振り返ってみますと、満州の教育はあまり知らないんですが、台湾の場合は、日本人と台湾人とは、小学校レベルから分けて教育をしまして、日本人が行くのは小学校、台湾人（本島人と言うことが多かった）の人たちは主として公学校というところでした。ただ、一部日本化の進んだ家庭でしようかね、そういう人は小学校の方へ入っていました。

中学に入った後で感じたんですが、本島人というのは非常に優秀なんです。私は花蓮港の中学校だったんですが、100人のうちいわゆる本島人というのは1割ぐらいいかないんですが、いずれもできるんですね。私は、どうして1割かなというのはかなり疑問に思ってたんですが、台北帝大の予科に入りましたときもやはり1割ぐらいいかなんですね。これはどうも採用試験のときに枠が設定されてたんじゃなくのかなというような気が今でもしてるわけですが、これははっきりしたことは覚えてませんが、戦後、たまたま台南高等工業学校の話を書きましたところ、そこでも一応そういう枠を続けてきたけれども、昭和19年か20年の入学試験のときに、その比率ががらりと変わり、半々ぐらいになったとのことですね。それがどうも実力じゃないかなという気がします。当時、台湾は日本人が40万、本島人は600万ということですが、本島人のうち都会でいわゆる中等、高等教育を受ける人たちの数というのは限られてましたけれども、実際の力としては非常に優れていたのではないかなと思ってるわけです。

○司会 ありがとうございます。私も台湾大学に行ったことがあります。いちばん昔の面影が残っているのはあそこらしいですね。戦前の校舎なども残っていて、昔のことを知ってる人は大変懐かしいという話を聞きました。そういう意味でいうと、旅順工大の後はどうなっているのでしょうか。

○小野 旅順はもともと軍港なんです。ですから、つい最近まで日本人は全然入れなかった。旅順工大は、もとロシア海軍の病院だったので、今、中国の海軍の設備になっているらしい。ですから、ほかの皆さんの学校に比べて継続性がなく、大変残念なんです。旅順工大だけは消えてなくなってるわけですね。今、大連理工学院がありますけれども、あれは南満工業専門学校の後身です。

○司会 そうですね。確かにほかの二つの帝大とは違うところがありますね。

○小野 南満工業専門学校は、満州鉄道がつくった専門学校で

すね。私も1, 2度講義に行きましたけど、何となしに違和感があります。

○司会 どうもありがとうございました。

私の手元に城大の機械工学科の授業科目一覧（昭和17年の時点、附録表1参照）があります。私は新製の昭和29年卒業ですが、私が習ったものとほとんど変わりがありません。私のころは自動制御がようやく授業に採り入れ始められたころで、城大時代にはまだ自動制御はありませんが、本質的にはほとんど変わらないカリキュラムですね。表面的に見ると、どこでも似たような教育がされていたと思われませんが、先生と学生の接触によって、現実の教育そのものの中身は随分変わっていたのではないかと思います。

現在の日本の留学生受入れへの助言、提言

○司会 それでは、これから話を現代に戻したいと思います。今、文部省は「留学生10万人計画」と称する、2000年までに日本で学ぶ留学生を10万人に増やそうという計画の実現に努力しています。今のところ、まだ6万人ぐらいですが、それでも格段と留学生の数は増えてきています。留学生のうち、恐らく9割はいわゆるアジア圏で、そのうち約3/4は漢字圏になりますかね。大学の研究室に行ってみると、日本人よりも留学生の方が多いうところも珍しくなくなってきました。このように、研究室も国際化の時代に入っていますが、私の経験では、基本的に「どこの国の学生」とあまり意識しない方がよいですね。自分の留学経験から考えてみても、いちばんありがたいと思ったのは、全く差別されなかったということだったものですから。大学の中では、我々は差別の意識なしに全く同じような扱いをしているとは思いますが、ひとたび下宿探しのよう話となって世の中の風に吹かれると、いろいろな差別や苦労があるように感じています。

皆さん方は、今となっては極めて特異な体験をお持ちですが、これから主にアジア、あるいは漢字圏を中心として留学生を迎える上で、何か後輩である今の先生方にアドバイスをいただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

○金井 私も、アメリカの留学経験がありまして、アメリカというのは、多民族が共生している社会ですが、個人的な接触というものが日本の大学よりも非常に強いと感じましたね。例えば私ども外国からきている人間でも、機械工学科の主任教授がバイブルクラスなんかやっていて、言葉の勉強をするつもりだけでもいいから参加しないかと呼んでくれました。

私どもの受けました旧制の教育というのは非常に小規模教育で、例えば中学、高校、大学での先生の印象というのが非常に強く残っているわけですね。語学や数学という講義の中でちゃんといつも残っている。今の教育はそれがなくなったんじゃないかなという気が実はしています。そういう人間本来の人と人との結びつきが失われないような形で社会そのものの構造ができていないと、外国人の留学生を受け入れるということが本質的にやりにくいんじゃないかなと感じています。ですから、大学の方でも、組織の一部として、そういうことをやるところが

あることが求められているのではないかなという気がしますね。

○司会 そうですね、確かに大学も新制大学になりましたし、学生の数も多くなって、先生と学生との接触、とくに人格的な干渉があるような形での接触は薄れる一方ですね。まして留学生となってくると、もっとその辺のところの接触は薄れるかもしれません。

○小野 それにちょっと補足させていただいてよろしゅうございますか。私はまず、日本の大学は外国人の教授をもっと入れるべきと思います。例えば中国語による講義があり、それを日本人学生が聞くというようなことが友好のためには非常に有効ではないかと思えます。教員の方が全部日本人で、留学生だけ受け入れるのではなくて、むしろ外国人の先生方を受け入れていただきたいと感じています。

○司会 それは制度としては可能なのですが、現実には難しいところですね。例えば国立大学では、昔は公務員に外国人はだめというようなことがありましたが、今はその規制はなく、全く日本人と同じように雇用できます。しかし、制度的には整っても、現実には例がはなはだ少ないという状況になっていますので、今のご注意は本当に耳の痛い話ではないかと思えます。

それから、個人的接触を強くする点では、当時の外地の高等教育機関は、恐らくかなり少数精鋭的な、先駆的なもので、先生同士、先生と学生、あるいは学生同士との接触は、ほかと比べても強かったのではないのでしょうか。その辺はいかがでしょうか。

○小野 昔の我々の学校というのは、教員の数と学生数が拮抗しておったですね。ですから、先生方の研究指導を直接受けられた。私もそれを非常に幸福に思っておるんですけど。

○司会 さきほどの台北帝大の機械工学科では、先生方の方が多かったわけですか。

○久本 いえ、学生16人に対して、助手の方は別として、機械工学科専任の先生は教授2人と助教授1人の3人でした。

○小野 旅順工大の場合は、学年当たり日本人60名、それに中国人が約14~15名で、合計75人ぐらいです。学科は航空、電気、機械といろいろありましたから、小さな学科では本当に学生数2~3人になりますね。

○森 留学生に関して群馬大学の例をちょっと申し上げたいと思います。群馬大学でも積極的に留学生を入れるように努力していて、いちばん多いのが中国からで、それから韓国、台湾、インドネシアの順です。国費と私費の留学生がいて、私費の方がずっと多い。学部別ですと教育学部がいちばん多く、2番目に工学部ということです。また、留学生は博士コースに行く人が増えていて、これは国に帰ってから待遇がよくなるということが理由だというふう聞いております。

留学生がいちばん困ることは、アパートを借りるような場合に障害があることですね。ですから、大学としても留学生専用の宿舎をつくっております。また、留学生と教官との接触のことですけれども、私が在職してた頃はまだ留学生の数が少なかったので、本当に手をとるようになってマンツーマンで教えまし

た。

国際交流ということは、今後日本の発展に必要なことで、そのために、まず、言葉の交流がいちばん必要だと思います。

○神力 学問もそうですけれども、日本の国に来て勉強するという場合には、衣食住の問題がどうしてもつきまといまいますね。これが大変だろうと思います。日本は「食」にしろ「住」にしろ、非常に高いですね。これに対して、アメリカは本当に驚くほど生活費は安い。ですから、このように物価が高いと、日本は何も留学生問題だけでなく産業や人間も空洞化していきますよね。特に東南アジアの方が来られると、自分の費用で勉強しようなんてことは並大抵ではできません。何か彼らをそのような心配から解放してやることをしてあげなきゃいけないのではないかというのが私の印象です。

というのは、特に東南アジアの人たちがアメリカ、あるいはヨーロッパに行くとき、非常に良い感じを持って帰ってきてますね。学問でかなりやりたいことはやったという満足感は、日本から帰った人にもあるかもしれないけれども、逆につらかった印象というか、それにも増して何か日本で勉強して、かえって日本に嫌な感じを持つというような逆効果があるのではないのでしょうか。

○司会 確かに高い生活コストは数字的にも明らかですね。果たしてその高コストに耐えてまで勉強する価値が日本の教育にあるのかという点が問題になるわけです。最近の偏差値形態の時代では、学生は入学するのに精力を使い果たして、大学の4年間は青春の息抜きの時代となっています。そういうところに留学してきた人たちは失望しますね。私は、留学生を集めようとするならば、まず我々の教育の質そのものを上げなければならぬと主張しているのですが、その改革は、まだまだ道遠しという感じです。

○神力 これはちょっと次元が違いますけれど、あるインドの先生が日本の高等学校教育の実情を視察に来られた。そして「日本は本当に自由主義の国で自由の国だから、教育もそうだろうと思ったら、日本ほど教育に自由のない国はない」と驚いていたということを私立高校の先生から聞きました。このがんじ絡めの高校生が、大学へ行くと、今、大橋さんがおっしゃったように開放された気分で、もう天国のように遊ぶ方をエンジョイしている。

これを打破するようにしないと、確かにコストのかかる日本留学で得るものがなくなり、それは重大な問題だなと思ってます。

○司会 よその国では全部、大学への入り口よりも出口を重視しています。いかに在学中に能力を高めるかが問題なんですけれど、日本は残念ながら入り口重視で、出口軽視がずっとしみてきています。それが大学の学生生活に反映されていますので、留学生はかなり失望しますよね。我々が研究室へ留学生を迎えるのは、彼らの勉学の気風を日本人の学生に移したいと思っているところも多分にあるんです。

○小野 私は、電気工学科を卒業したので、昔の習った教育は全然役に立たない。しかし、あの当時のマンツーマンで、どう

やって推理するのか、どうやって仕事を進めるのかという思考過程と創造の重要性を教えてもらえ、それらが全部役に立って、今の僕らがあると思うんですよ。ところが、今の入学試験を見ても創造力といえますか、考える力を全然試していないようです。

○司会 今のお話は、要するに片々たる知識を教えるのではなく、考え方の基本を教えることが大事だということで、そういう点はまさしく日本の教育に欠落しているところだと思います。このような点を根本的に直していかないと、留学生を引きつける力などとても出てこない。ところで、日本の生活費は世界で恐らく最高ですけど、大学の月謝で比べると、まだアメリカの方が日本より高くなっています。州立大学は余り差がないかもしれませんが、私立大学は驚くような月謝、恐らく年間200万円ぐらいを取っています。これだけのコストを払ってでもアメリカで勉強しようという人が多いんですから、アメリカも大したものだと思っています。ところで、今、文部省が国費留学生に支払っている奨学金は月額18万円ぐらいですか。

○編集部 (伊東) 月額18万円と年5万円の国内視察旅費です。

○司会 それは世界で最高の奨学金ですよ。

○編集部 ちなみに修士卒業の助手の初任給は、たしか16万5000円ぐらいで、国費の留学生の方が少々高いです。

○司会 国費留学生が日本の会社の工場訪問に行くと、若い社員は、どうして自分たちの奨学金よりも少ない初任給でこんなに一生懸命働くのかよくわからないと言っています。文部省はそれだけ高い奨学金を払って留学生を集めようとしているわけですから、それに見合うだけの教育内容がどうしても必要だと思います。

今後の工学教育のあり方

○司会 三浦さん、特に今後の工学教育について何かご意見がございませんか。

○三浦 昨年(1997年)の日本機械学会誌10月号、工学教育の特集号ですが、そこで理工学教育の座談会があり、私は大変興味を持ちました。また、「好奇心を失った生徒をどう教育するか」ということ、あるいは、東北大学長の西沢潤一氏による「小さいときからの科学教育が非常にたいせつだ」という提言は、今後の工学教育のキーワードの例でしょう。

ただ、日本の工学教育の落とし穴は偏差値教育であり、あれでは、とにかく知識がたくさんあればいいということに傾倒してしまうのではないかと思います。これからは小さいときから好奇心を起こさせて、自分で物を考え、創造するという力を養うことが、今後の日本の発展のキーポイントの一つではなからうかと思っております。

○神力 私は、子供たちが自然に接する、あるいは家の手伝いをするというようなところから自然に科学する心が出てくると思うんですね。それを抜きにして教育システムを考えてみても、それはなんの役にも立たないと思うんですね。

また、だれもかれもが科学者、技術者にならなくても良いの

ですよ。そういう選択の自由も日本では奪われているのではないかと思うんですね。

○司会 今、また一段掘り下げた言い方をされたわけですが、結局、豊かさというものが諸悪の根源になっているという感じもします。そうなってくると、営々として日本の国を豊かに発展させるために努力してこられた方々が、今どういう思いでこの時代を見ているかということになり、複雑な思いですね。

○神力 それは心がけというか、あるいはやり方でもって救える問題だと思うんです。ドイツも日本と同じく豊かですよ。しかし、大きな違いがあり、それが何に起因しているのかが問題ですね。やはり「豊かさを克服するだけの心」という面に日本は意を用いてませんよね。そこが問題なんですよ。

○久本 そのような「心」の問題といえば、戦争中の文部省は立派でした。工学部学生の入営延期という制度を軍部と交渉して成立させた。文科系は全員学徒出陣したのに……。あのとき同時に私たち工学部の学生も学徒出陣させられていれば、台北帝大工学部というのは成り立たなかったんです。当時の軍部に対して文部省は頑張ったと思います。

○司会 私も、それはつくづく思いますね。例えば戦中、戦後の極めて混乱した時代に教育を受けられた方が、戦後の日本の産業発展の中核を担われたわけです。なぜか、我々は、教育というと、すぐカリキュラムの話を始めますが、それ以前に人材の問題があります。戦中、戦後は工学系に資質の高い人たちが集まったと思います。その集まった原動力は、今まさしく久本さんが言われたことが極めて大きい因子だったと思います。

○小野 戦後は、航空学科や造兵学科は進駐軍によって禁止され、関係者は全部職がなくなりました。しかし、考えてみたら、戦後エレクトロニクスを発展させた中核は、ほとんど航空学科出身の人なんです。

○司会 昔の工学部は、まさしく軍事力と密着していて、いかに良い飛行機、戦車、あるいは軍艦をつくるかが国の運命を支配すると、みんな自覚していました。戦後になると、廃墟の中からの復興の担い手は、工業だろうということで、何となくその重要性が国民の間でも自然に受け入れられていました。しかし、今の人たちは豊かさの中に生まれてきているのですから、産業というのは、目新しい商品を次から次へ作って買わせるよ



大橋 秀雄
おお しま ひで お

- ◎1931年5月生まれ
- ◎1954年東京大学工学部機械工学科卒業、東京大学名誉教授、工学院大学学長、日本学術会議会員、第70期日本機械学会会長
- ◎現在の研究・業務 流体工学、環境工学
- ◎工学院大学（〒163-91 東京都新宿区西新宿1-24-2）

うなものじゃないかという認識しかなく、技術が社会の基盤を支える力になっていることは全く認識していません。

ですから、工学を志そうという人がだんだん少なくなっていくという悲しい現実があるのです。

○小野 先ほど言われたように、工学というのは物をいじることから始まるんですね。だから、ナイフを使っちゃいかんとか言わずに、実際、実習をやらすということが基本じゃないでしょうかね。

○神力 やはり好きな人がその道を選べばいいんですよ。文系と理系とはっきり区別し過ぎますね、日本は、教育は、もっと混然一体なものじゃないかと思うんですね。

○三浦 今、混然一体というお話が出たので気がつきましたが、例の習熟曲線の理論がありますね。要するに対数曲線を使うと、人間の動作に係わる工場の能率のようなものが表現できるのですね。

○司会 それでは、きょうは12時半までの予定でお集まりいただきましたのに、時間が延びて失礼しました。そろそろ終了にさせていただきます。本日はどうもありがとうございます。

5. 要 約

以上のような座談会を通して、韓国、台湾および我が国に共通して認められた後世に残すべきと考えられるものを幾つか以下にまとめておきたい。

(1) 卒業後の活動に役立ったところの多い基礎科目の重視

基礎科目である、語学、数学、物理等の習得により得た学力は、専門分野におけるしっかりした教育とともに、属する民族に関係なく高いポテンシャル、特に創造性を卒業生に付与した。それらは、その後の新たな分野への展開、資質の向上、仕事の遂行等で大きく役立ったことは、京城帝国大学、台北帝国大学、台南高等工業学校の韓国人および台湾人卒業生が必ず指摘したところである。特に、帝国大学予科の効用を日韓ともに挙げているのが印象的であった。なお、その背景は「人格的な面を強調した少数精鋭の教育」にあったと思われる。

(2) 国際化における「人的資源」と「差別の撤廃」の重要性

参集いただいた現地人卒業生が「良かったこと」としている物事は、ほとんどの場合、教官に適任者を得ていることに帰せ

られるようである。具体的には、いずれの場合も創設時に優秀な人材を配置していたことが挙げられる。要するに、国籍や民族は問題ではなく、集まった学生と教官の個人としての才能、見識や品格、教養、すなわち人そのものが優れていたことである。このことは、戦後でも、京城帝国大学出身者は信用されたとする韓国の方々の一言に表現されている。また、旅順工科大学の全寮制による日中学生の共同生活や予科、学部を通しての現地学生との人間としてのつきあいが、国の政策のいかんにかかわらず、ヒューマンネットワークの形成に大きく役立ち、現在でも交流が続いているとの指摘が日・韓・台のすべてからなされている。これは、国際派技術者の育成方法として、ひとつの好ましい姿を示唆している。

その一方、日本人に較べて入学試験時における定員枠の少なさ、あるいは教官として任官後の待遇面における日本人との顕著な差別の存在は必ず指摘され、これが現在の日本からの技術移転や日本との技術協力にかなりの負の効果をもたらしている。この差別の存在は、当時の日本人学生にも不鮮明ながら感得されて「日本人主体の発想方法を脱し切れなかった」と回想されている。あえていえば、これと同じことが、大学、企業を問わず現在の我が国の留学生受け入れ体制に一部認められるようである。例えば、中国人留学生が就職する際の「みえない壁」が存在する社会体制、外国人留学生を「外教」として入学させる大学院の体質等は、好ましい方向へ改善すべきであろう。

(3) 帝国大学での講義は「知識注入方式」

その当時の流儀であったのかも知れないが、ノートを取らせるのみの一方的な講義の方式には批判が強かった。

(4) 日本の研究および技術資料を伝ばさせることの重要性の指摘

現在でも、日本の技術は優れている面が多々あるのに、日本語による日本の技術資料の普及が年々減少していて、これは双方にとって良いことではないと韓国および台湾で指摘された。そして、これらの二国では、日本の研究・技術資料の積極的な普及を望んでいる。特に、台湾では、戦前の「図面作成に伴う総合的創造能力養成のための設計・製図」と「調査研究や資料収集を通じた自己啓発を促す卒業研究」を重視する教育の効果が高く評価され、これが戦後技術伝承されなかったことが一つの問題点として指摘されている。

6. 謝 辞

すでに、50年以上も昔のことを話題とした企画であったので当初座談会の開催が危ぶまれたが、座談会への参加者を始め、次の方々のご尽力と協力により本記事をまとめることができた。ここに、ご紹介させていただくとともに、紙面を借りて深甚の謝意を表したい。

まず、関連資料および関係者の情報収集については、水野順子氏（アジア経済研究所）、伊藤英覚氏（東北大学名誉教授）、今井兼一郎氏（本会元会長）、ならびに城戸健一氏（千葉工業大学教授/東北大学名誉教授）のお世話になった。また、座談会全般については佐藤壽芳氏（中央大学教授/東京大学名誉教授）の助言を、韓国での座談会については朴 天卿氏（水原大学校教授/前ソウル大学校教授）および李 宣珪氏（光州科学技術院副教授）、台湾での座談会については頼 光哲氏（大同工学院教授）および陳 明豊氏（工業技術研究院機械工業研究所組長）にご手配をいただいた。

7. 参考資料

本記事をまとめるに際して使用した資料は次の通りであり、その多くはアジア経済研究所に収録されている。

- (1) 旅順工科学堂・旅順工科大学沿革。
- (2) 朝鮮総督府。施政 30 年史, (1972), 東京, 名著出版。
- (3) 朝鮮施政発展史。
- (4) 条約局法規課, 第四部の二 日本統治時代の朝鮮, 外地法制誌, (1971-3)。
- (5) 渡辺豊日子, 口述「朝鮮総督府回顧談」, 友邦シリーズ, No. 27 (1984-8), (財)友邦協会。
- (6) 京城帝国大学創立 50 周年記念編集委員会編, 紺碧遙かに一京城帝国大学創立 50 周年記念誌, (1974), 耕文社。
- (7) 京城帝国大学一覽 昭和 17 年, (1943-3), 京城帝国大学。
- (8) 遥かなり佛岩山一京城帝国大学理工学部開部 45 周年記念誌, (1988-7), 京城帝国大学理工学部開部 45 周年記念事業実行委員会。
- (9) 台北帝国大学一覽, (1936), 台北帝国大学。
- (10) 台湾統治概要, (1945), 台湾総督府。
- (11) 東北大学名誉教授伊藤英覚氏からの私信。
- (12) 台湾総督府, 台南高等工業学校一覽 昭和 15 年度, (1940-7), 台湾総督府台南高等工業学校。
- (13) 台湾総督府台南高等工業学校沿革史 (抄)。

(付録) 戦前の台湾, 朝鮮半島, ならびに満州に創設された機械工学関連の高等教育機関の概要

台湾には, 台北帝国大学および台南高等工業学校, 朝鮮半島には京城帝国大学, 京城高等工業学校 (後の京城工業専門学校), 京城鉱山専門学校, 大同工業専門学校, 平壤工業専門学校, 満州には旅順工科学堂 (後の旅順工科大学), 新京工業専門学校 (後の新京工業大学), 南満工業専門学校などを創設。今回の座談会は, これらのうちから代表的な4校を選択し, 開催。

(1) 旅順工科学堂/旅順工科大学⁽¹⁾

明治42年5月旅順工科学堂官制が公布され, 明治43年4月に機械工学科, 電気工学科, 採鉱冶金科の三科をもって開学。大正5年中国人生徒のために予備科を設置するが, 大正11年3月廃止。大正11年3月旅順工科大学官制の公布により文部省が管轄する関東庁立として大学および大学予科を設置。その後, 昭和11年6月応用化学科, 昭和14年4月航空学科, 昭和17年4月教養学科を増設。

敗戦により, 昭和21年11月大学本部を閉鎖。大正2年の日本機械学会誌の掲載記事によれば, 4年制と年2学期制を特色とし, 製図・実験・実習の合計時間数88時間 (参考: 東京高等工業学校は61時間)。

(2) 京城帝国大学理工学部機械工学科

大正11年2月新教育令で設置承認, 大正13年5月京城帝国大学官制の公布と予科開校⁽²⁾がなされ, 大正15年4月京城帝国大学官制が改正され, 法文学部と医学部を設置⁽⁴⁾, 大学の開設。理工学部は昭和13年4月に開設を決定し, 進学予定の予科生徒40名を収容⁽²⁾⁽⁷⁾, 昭和16年4月より学部を開講⁽²⁾⁽⁷⁾。朝鮮における鉱工業の躍進への対応, ならびに戦時体制下における鉱業開発への一段の努力⁽³⁾⁽⁴⁾に資するため, 大学の組織, 内容は共に内地における帝国大学とほとんど同様であり, 内鮮人共学⁽⁴⁾。

講座の変遷⁽⁴⁾⁽⁷⁾は次の通り: 理工学部にて熱工学1講座設置 (昭和15年12月), 機械工学科2講座設置 (昭和16年4月), 同学科2講座を4講座へ (昭和17年4月), 同学科4講座を5講座へ (昭和18年4月), 理工学部にて工業技術管理論1講座を追加 (昭和19年10月)。教官として, 朝鮮総督府技師, 朝鮮総督府鉄道局技師, 朝鮮総督府気象台技師, 旅順工科大学教授, 九州帝国大学教授, 東北帝国大学教授, ならびに東京帝国大学教授の応援あり。

[参考1] 昭和17年12月の時点の理工学部構成は次の通り。

物理学5講座, 化学4講座, 土木工学5講座, 機械工学4講座, 電気工学4講座, 応用化学4講座, 鉱山学2講座, 冶金学3講座, 数学1講座, 応用力学1講座, 応用物理学1講座, 分析化学1講座, 熱工学1講座, ならびに鉱物地質学1講座。

[参考2] 授業科目 (昭和17年の時点; カッコ内は単位数) を表1に示す。

表1 京城帝国大学理工学部機械工学科の授業科目

機構学 (1)	機械力学 (1)	機械工作法 (2)
工作機械 (2)	実験機械工学 (1)	水力学および水力機械 (2)
水車 (1)	ポンプ (1)	熱機関一般 (1)
蒸気缶および蒸気機関 (2)		蒸気タービン (2)
内燃機関 (2)	機械設計大要 (1)	機械設計第一 (2)
機械設計第二 (1)		流体力学 (2)
内燃機関特論 (1)		自動車工学 (1)
航空機一般 (1)	船用機関 (1)	鉄道車両 (1)
操重機 (1)	送風機および圧縮機 (1)	冷凍機および冷凍法 (1)
紡織機械 (1)	暖房および換気 (1)	原動機設計 (1)
機械製図大要 (1)		機械製図第一 (2)
機械製図第二 (3)		機械工作法実習 (1)
材料強弱実験 (1)		機械工学実験第一 (1)
機械工学実験第二 (3)		機械工学実習 (1)
機械工学論文輪講 (1)		

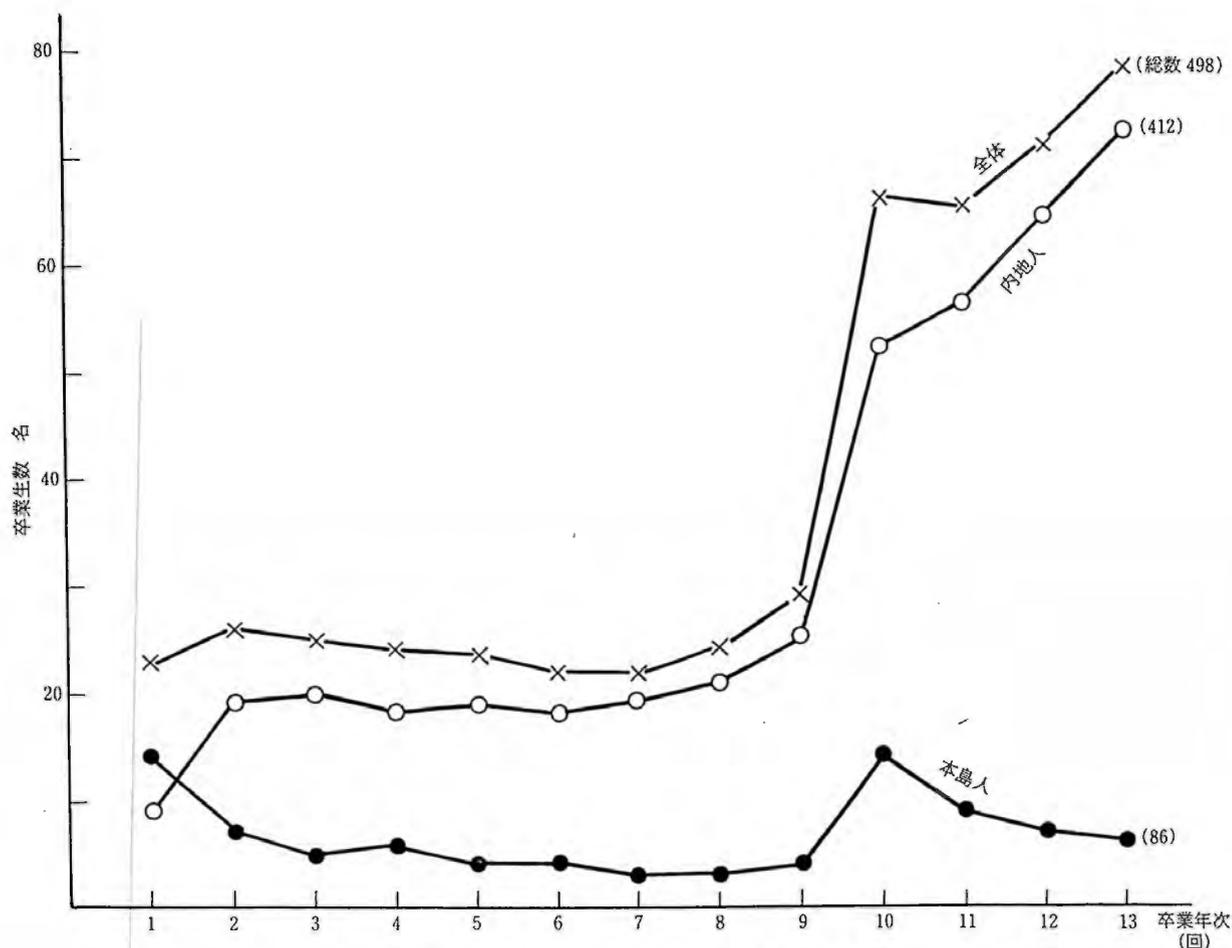


図1 台南高等工業学校機械工学科卒業生の変遷
(謝教授よりいただいた資料より伊東作成)

日本の敗戦後、昭和20年9月末まで日本人の管理下にあったが、同年10月に京城大学と名称変更(総長: Harry B. Anstadt氏, 理工学部長: 李泰圭氏)。その後、昭和21年8月京城工業専門学校、京城鉱山専門学校とともに、大韓民国、国立ソウル大学校工科大学へ移行。帝国大学としての3年間における機械工学科の卒業生29名(内9名朝鮮人)、理工学部全体の卒業生は92名⁽⁹⁾。

(3) 台北帝国大学工学部機械工学科

台北帝国大学は、昭和3年4月文政学部および理農学部を擁して開学⁽⁹⁾。工学部は昭和18年10月20日第1回予科生徒(昭和16年6月20日入学⁽¹¹⁾)の内工類に所属した者を第1回学生(機械工学科学生数: 16名, 内1名台湾人)として授業開始。第1回生は、昭和18年9月27日(戦時中の半年繰り上げ)卒業⁽¹¹⁾。工学部は機械工学科、電気工学科、応用化学科、土木工学科の4学科30講座構成⁽¹⁰⁾。昭和19年10月入学生(20名, 内1名台湾人)、昭和20年4月入学生(16名)まで3期存続⁽¹¹⁾。敗戦後、中華民国政府に接收され、昭和21年3月に授業終了⁽¹¹⁾。現在は、台湾大学。

(4) 台湾総督府台南高等工業学校⁽¹²⁾⁽¹³⁾

昭和3年、第56議会にて設立準備費と校舎新営費を可決し、昭和6年1月官制実施に伴う規則公布。昭和6年3月第1回入学者許可(機械工学科25名, 電気工学科25名, 応用化学科22名)。同年4月授業開始。昭和20年の敗戦後、昭和21年2月に中華民国政府に接收され、台南工業専科学校となり、わずか1年足らずで台湾省立工学院へ移行。その後、現在の成功大学となる。

【参考】昭和8年の時点にて学生数75名/一学年(3年制)に対して、教授20名、助教授9名、書記5名⁽¹²⁾。機械工学科学生数の変遷を図1に示す。

(文責 伊東 誼 東京工業大学)